



Data

監督・製作・脚本：イェジー・スコ
リモフスキ

映画監督：リチャード・ドーマー

出演：ヴォイチェフ・メツファルド
フスキ/パウリナ・ハブコ
/アンジェイ・ヒラ/ダヴィ
ド・オグロドニク/アガ
タ・ブゼク/ピョートル・グ
ウォヴァツキ/アンナ・マ
リア・プチェク/ヤン・ノ
ヴィツキ/ウカシュ・シコ
ラ/イフィ・ウデ

■■■ショートコメント■■■

◆「群像劇」はある意味で三谷幸喜の得意分野で、現在放映中のNHK大河ドラマ『真田丸』もある意味で群像劇。しかして、カンヌ、ベルリン、ヴェネチアの三大映画祭を制したポーランドの巨匠イェジー・スコリモフスキ監督の本作も、ある意味で群像劇だ。

序盤から中盤への展開では、女たらしの映画監督、やきもち焼きの夫、刑務所から出てきて間もないホットドッグ屋、強盗に失敗した少年など、現代の大都会でそれぞれ何らかの事情を抱えながら生きている11人の男女と1匹の犬が登場し、彼らの午後5時から5時11分までの物語が何の脈絡もなくバラバラに展開していく。女たらしの映画監督がホテルで会っているのはやきもち焼きの夫の妻だから、その3人の人物は関連性があるが、それは例外で、その他は関連性のない物語ばかりだ。ところがタイトルどおり「イレブン・ミニッツ」が過ぎ午後5時11分に至ると、あっと驚くハプニングによって突然それらが結びつき、あっと驚く結末へ。

なるほど、なるほど、本作では11名プラス一匹が織りなす群像劇はそれを描くことが目的ではなく、あっと驚くこの結末を導くための手段だったわけだ。それはそれでわかるのだが・・・。

◆映画作りはカメラで被写体を撮影するところから始まるが、映画の歴史と共に撮影手法は様々な形で進化してきた。そんな中で、ベテラン監督は往々にして昔の撮影手法にこだわるものだが、78歳のイェジー・スコリモフスキ監督は手持ちカメラを様々な角度で多用しながら、撮影のターゲットを次々と転換していくから、目が疲れるのはもちろん、誰が誰やら、何が何やらよく分からないまま、断片的な情報がスクリーンいっぱいに表示されてくる。ちなみに、思いっきり下のアングルから撮る撮影手法は日本の某有名監督も得意だったそうだが、本作にもスカート姿で歩く女性を超ローアングルで撮る手法が登場す

るので、それにも注目！

また、本作でイエジー・スコリモフスキ監督がみせるユニークさは、音楽、と言うより不気味な音の多用。大型のジェット機が超高層ビルのすぐ近くを飛ぶシーンでは、ブーンという不気味な音と共にジェット機の進行方向が気になったが、2001年の9.11テロの再現にならなかったのは幸いだ。私はイエジー・スコリモフスキ監督作品を『アンナと過ごした4日間』ではじめて観たが、視きをテーマとした同作の映像は全体的に薄暗くわかりにくいものだった（『シネマルーム23』80頁参照）から、本作は同作とはまったく違う映像になっている。

それはともかく、本作にみるカメラ撮影手法と音響手法はかなりユニークなので、その方面の勉強をしている人は必見。

◆今日9月1日木曜日は、NHKのBS1でハリウッド版の『戦争と平和』（57年）が放映されるのでDVD録画予約をしている。こんな世界文学全集の代表のような映画は、激動の時代の中を生きた主人公たちが織りなす壮大なストーリーを楽しみ、また原作者や映画監督が訴えたい壮大なテーマを考えながら鑑賞するもの。それに対して本作のような映画は、アイデア勝負の一発作品としてイエジー・スコリモフスキ監督が観客に挑戦したのだから、ストーリー展開の内容や充実度で勝負するのではなく、あっと驚くラストを中心としたアイデアと工夫に観客がどれだけ驚き、納得、賞賛するかの勝負になる。本作でもストーリー的に何かあるのでは？と思わせるものは映画監督と女優のホテルの一室での密会とそれを追う嫉妬深い夫との関係だけで、他の登場人物は単に5時から夕方5時11分までの動きをカメラで追っているだけだから、ストーリーといえるほどのものは何もない。したがって、私たち観客がそんな登場人物たちの動きをスクリーン上で追っていくのは、最後に待っているはずの「あっと驚く結末」を期待してのことだが、さて本作の結末は、そんな期待に見合うものになっているの？本作の「あっと驚く結末」は冒頭に見せたスピーディーなカメラワークとは正反対に、どうしてもスローモーションを多用しなければならないものになっているが、さてその「あっと驚く結末」とは？

ここで本当にあっと驚くことができ、イエジー・スコリモフスキ監督のアイデアに脱帽することができれば本作の評価はうなぎのぼりだが、何だこんな結末か？と思う程度のものだったら・・・？

2016（平成28）年9月2日記